

VI 出石城跡の現状とその取扱いについて

調査者（浅田 哲也、宮田 和男、鶴田 誠、
西村 貴志、鬼丸 貞英、谷川 亘）

1 要 旨

出石城跡の現状を調査した結果、今後次のような取扱いを講ずることが望まれる。

①樹種構成の検討

- 1) サクラ：過密の傾向にあるので、交錯した樹は切除して、残った樹の生育を促進させる。
- 2) モミジ：過密傾向にあるので、抜き切りを行って残った木の樹勢を高める。

②外来種の取扱い

歴史ある城跡に外来種はそぐわないので、可能な限り切り除く。

③樹木の管理

- 1) 土壌改良：城跡全体が人による踏み固めによって、樹木の根の伸長を阻害しているため、土壌の改良が必要である。
- 2) 剪定と断幹：樹木は枝が交錯したり、込み合ったりしているため、断幹、剪定を行う必要がある。しかし、剪定、断幹した切り口に癒合剤を塗布する必要がある。
- 3) 病虫害の防除：テングス病やアブラムシなどが発生しており、こまめな管理が必要である。
- 4) 雑草の防除：石垣などに雑草が繁茂しており、これの防除に環境にやさしい除草剤を散布して、繁茂を防ぐことが望まれる。

④石垣と樹木

一般に石垣に生育する樹木は樹木の根が肥大することによって石垣が崩される危険があるといわれているが、樹木の断幹や根の抑制によって防ぐことも可能であり、十分管理することが望まれる。

⑤日常の管理

可能な限り、城跡の樹木を観察、管理する人を置き、管理することを望みたい。

2 はじめに

豊岡市出石町は、歴史ある町並み（重要伝統的建造物群保存地区）が佇み、近畿最古の芝居小屋「永楽館」を有するなど、歴史と文化の観光地である。そのなかで出石城跡は、豊岡市の観光産業における象徴的存在であり、市民（特に豊岡市出石町民）の関心も高い。その城跡における最大の価値は石垣であると見るが、石垣と共に景観を演出する樹木の価値も重要である。地域住民の思いとして、「石垣とサクラの出石城跡」という価値観が大勢であり、市民意識での植生・樹木としての「サクラ」の扱いは別格で

ある。

地域の住民の聞取から、城跡では およそ 10 年前にサクラの整備・伐採が行われた。その目的として、「石垣を見せる。」「危険木・枝を取り除き、安全性を確保する」の 2 点を主に、「サクラとモミジの調和をとりながら間引く」というものであった。そして、当時から現在に至り、サクラを伐るという行為について、賛否の意見が存在する。地域として多様な思い・価値観があるなかで、何が正しく 何が間違っているかを論じるのは、大変難しいことである。その対象が「サクラ」であれば、尚更であると思われる。時は経過し、樹木は生長する。現在、およそ 10 年前の問題が、再び想起される状態である。この間、地域有志の方々により新たにサクラが植えられ、城跡の植生・配植には変化も見られる。聞取を行うにつれ、管理にあたる豊岡市、地域有志の方々の思い・価値観が、城跡内にて様々に交錯していることが伺える。

この経緯をふまえ、現在出石城跡の植生・植栽に必要なことは、「皆が理解し、共有できる ひとつの道」を作ることであると考え。それは「継続性ある方向性の策定」であり、その策定とは、出石城跡の植生・植栽における将来的なビジョンの構築である。

本報告では「兵庫県みどりのヘリテージマネージャー」が調査・検討の結果を「出石城跡の現状報告とその取扱いについての報告書」として提出し、文化財保護と観光資源としての出石城跡の魅力向上に繋げる一助となれば幸いである。

3 現状調査

(1) 調査日

平成 26 年 8 月 17 日 (日)

(2) 調査方法

- ・ 出石城跡についての、市民(出石町民)の方々への聞取調査
- ・ 目視での「サクラ・モミジの生育観察」「城跡の概況調査」

(3) 結 果

1) 出石城跡についての、市民(出石町民)の聞取調査

約 10 年前に行われたサクラの整備・伐採について「石垣を見せる」という話を伺った。この活動の主旨として「石垣とサクラの共存を図る」という考えが基であり、地域住民の意見・活動が事業の起こりであるとのことであった。

「サクラとモミジの調和をとりながら間引く」も同様に、サクラと周辺環境との共存を図るという考えで行われたものと思われる。伐られたのはサクラであるが、サクラが「悪」であるというわけではない。出石城跡でサクラを生かし、共存を図ろうと活動した結果である。

聞取を進めていくなかで、地域の方々の出石城跡への思い入れの強さを感じた。その強さ故に、を伐ったことへの反の意見も存在するのであろう。しかし、伐った行為についての非を求めることはできない。ここが前述した「地域として多様な思い・価値観があるなかで、何が正しく 何が間違っているかを論じるのは、大変 難しい

ことである」に繋がる。

調査の過程で城跡内を歩き、当時の切株を見ると、伐採対象の再考は必要であったのでは？と思われる箇所が何点か見られる。聞取のなかで「専門性のある助言がいただけるのであれば、有り難いこと」との意見も聞かれた。

地域の方々の意見・価値観と、専門性ある見解を合わせ、今後「出石城跡の植生・植栽における将来的なビジョンの構築」は必要であると感じた。どちらが欠けても、良い成果は得られない。手を重ね、より良い方向性を導くことが大切である。

2) 目視での「サクラ・モミジの生育観察」「城跡の概況調査」

①サクラ：全体として、植生が過密であり、樹木(サクラ)が競合しあう傾向にある。

これはサクラだけの問題ではなく、関係するモミジ等の植生も影響している。この過密性が「およそ 10 年前の整備・伐採」に繋がったものとする。新たにサクラが植えられ、およそ 10 年前の問題が、再び想起される状態である。今後、この過密性を緩和し、配植の再考を図る必要がある。

剪定・肥培・土壌改良の管理が行われていないように感じられる。現状のサクラを見るに、放任のままでは今後、状態の向上は望めず、衰退の傾向を辿るであろう。その例として、テングス病の発生・伝搬を挙げる。テングス病は、樹勢と景観の低下を招くものである。このテングス病を取り除くだけでも、現状のテングスにとって好転の材料である。肥料を一握り施す。この一握りが好転する兆しとなるであろう。小さな活動であっても、現在のサクラにとっては好転材料であり「効果的な活動に対して、敏感に反応してくれる状態にある」と考え大きな活動・小さな活動を問わず、積み重ねが求められる。



(写真-1) 発生したテングス病



(写真-2) 過繁茂のモミジ

(この切除だけでも、樹勢・景観について好転材料となる。)

②モミジ (ヤマモミジ) 過密性については、サクラと同様である。配植の再考を図る必要がある。無剪定のモミジが多く、過繁茂の傾向にあるため、石垣・サクラとの共存が現状として成り立っていないものが見られる。しかし、生育は良好である(良好であるが、過繁茂の傾向)。城跡という築城を目的とした土性にも関わらず、モミジは良い根を入れた樹種である。結果として、適地適性ならぬ「適城適性」が合ったのであろう。

4 現状から見た今後の課題

前述のサクラ・モミジについての今後の課題を「継続性ある方向性の策定」として考えた。

1) サクラを考える

出石城跡は、但馬のサクラの名所のひとつであり、NHKのサクラの開花予報での、但馬地方の目安は出石城跡である。しかし、現状の城跡のサクラはいかがなものか。サクラの名所と呼ぶには遠い状況にある。但馬のサクラの名所 復活に向け「継続性ある方向性の策定」が必要である。

(1) サクラの選択(量より、質)

サクラの本数が多く、密植の傾向にある。これは、二の丸跡に 特に見られる。サクラに限定しなければ、下の丸跡の樹木の混み合いも同様である。将来の生育を見据え、間引き・配植の再編が必要である。その案として、ひとつの空間を 2~3 本のサクラで競合し、生育鈍化するよりも、その空間を1本のサクラに託し、育成を行う。間引く行為により、将来を見据えた「思い切り」は必要である。この点は、その考え方を地域住民に説き、思い・価値観を合わせる作業が求められる。

今後、城跡内の遺構が存在するであろう箇所に、新たに植えるという行為は難しいことから、そのサクラの選択は、重要であり慎重な判断となる。

(2) 土壌改良

間引き・配植の再編を行うだけでは、サクラの育成とはならない。ここでの土壌改良では、肥料と排水性に重みをおくが、城跡の土壌をどれだけ掘ることが許されるのか、 選択されたサクラが植わっている地形・下層・土性による排水性の良否等、今回の調査では把握しきれなかった部分は、今後 再調査・検討が必要である。

(3) 剪定

現状の出石城跡のサクラを見るに、剪定は施行されていない(枯枝等の切除は、この項では剪定とは表現しないものとする)。サクラを育成するにあたり、剪定は必要事項であり、放任のサクラでは再び石垣を隠す「壁」となってしまう。骨格を作り、枝を透かすことで、眺めとして石垣と共存することは可能である。奥行き・奥深さの演出も期待できる。「サクラから透けて見える石垣」、サクラと石垣の調和は観光客の方々が写真に収めても、絵になる。開花期ならば、格別であろう。剪定の技法を用いることで、伐採という選択枝以外の管理方法が模索できる。景観の形成として、柔軟性のある対応が可能となる。

剪定に際し、テングス病の切除を行う。テングス病の発生は、その観光地における管理のバロメーターである。管理されているサクラほどテングス病がなく、管理されていないサクラほどテングス病が発生しているものである。出石城跡のサクラのテングス病は、初期であると思われる。初期であるからこそ、早期に切除する。感染が進み、大量に発生してからの対応では、サクラの美観・コスト面など、良いことは何もない。

2) モミジ

出石城跡における、植生・樹木の主役となるべきはサクラであろう。しかし、サクラがその魅力を最大限に発揮できるのは春の行楽期に限られる。秋の行楽期はモミジの紅葉がサクラに代わりその主役を担う。春の行楽期においても、モミジの新緑はサクラを引き立たせる最高の脇役といえる。モミジの存在意義・価値は高く「継続性ある方向性の策定」が必要である。

(1) 量より、質

前頁のサクラと同様である。サクラの配植・石垣との兼ね合い等を見て、育成すべきモミジを選択していく。

(2) 土壌改良

前頁のサクラと同様である。

(3) 剪定の導入

前頁のサクラと同様に、一部を除いて無剪定であると感じる。出石城跡の現状で、石垣を隠す「壁」となっているのはモミジである。伐採と剪定の選択において、石垣とサクラとの共存を図るべきであるが、ここで考えなければならないのが、「下の丸跡は、剪定が入っている」である。何を考えなければならないのか、その剪定の技法である。下の丸跡のモミジの剪定は、枝々を先止めしており、出石城跡を演出するモミジの剪定として、検討・一考の余地がある。モミジという樹種の魅力を生かすべく、骨格を作り、透かしの技法を入れるべきであろう。ここで「継続性ある方向性の策定」が鍵となる。例えば、10年かけて育成したモミジであっても、その年限りの先止め剪定や、鋸引きを入れられては、経年の労が無に帰してしまう。「継続性と方向性」その管理方法・理念を定めることが大切である。

3) サクラ・モミジの今後の課題と管理ポイント

育成するべきサクラ・モミジの選択、配植は再編を行うことで、今張られているロープ柵の区割りの検討が必要となってくる。これはサクラ・モミジの根系保護の範囲であり、散策道の構成といったものが主となる。

4) 城跡の樹木やその周辺の取り扱い

これまで、出石城跡の植生・植栽を構成する、主要なるサクラとモミジについて考えを述べてきたが、この項では、城跡内のその他の樹木・事柄について、その考えを述べる。

(1) 稲荷丸のスギ

稲荷神社(稲荷丸)に立つ御神木である。現状にて、本丸から稲荷丸への石垣の歪みは目視で確認できるほど、広範囲で激しい。今後、石垣保護の視点から「石垣がスギの根によりどの程度の孕みを起こすのかは検討課題である」。しかし、「みどりのヘリテージマネージャー」としては、伐採・断幹に委ねず、現状の勇壮な立ち姿を尊重したい。

(2) 本丸跡のヒラドツツジ(本丸からの眺望)

現状にて、本丸跡は城壁に囲まれており、城下町・町並みを眺めることが、まずできない。しかし、その「城跡の本丸からの眺め」というものは、訪れる方々に提供したいものである。ここで着目したいのが、写真のヒラドツツジである。城壁が、唯一開口している箇所に植えられている。その案としてヒラドツツジを皆伐、もしくは剪定を行い、本丸跡からの眺望ポイントを設ける。剪定にて眺望を演出するならば、現状の樹高1/3の高さを目安としたい。ヒラドツツの袂に立つサクラの剪定も併せ、必要となる。



(写真-3) 本丸跡のヒラドツツジ

したがって、皆伐・剪定により、眼下の二の丸跡のモミジの扱いも変わってくる。

(3) 樹木の取捨

稲荷参道にて目に付くのがシュロの発生である。シュロは城跡の景観に合わず、取り除くべきである。稲荷丸のセンダンの侵入も、今後問題となってくる。樹木の取捨・選別を考え、伐採する、処理するならばできるだけ早く施工にかかることが望ましい。

「日本の城跡」と「外来樹種」は、景観の組み合わせが合わないものが多く思われる。適地適性を考えるひとつの指針となる。

(4) 危険木・枝の整備

10年前の伐採での目的のひとつとして、「危険木・枝を取り除き、安全性を確保する」が挙げられた。現在、新たな危険木・枝が現れている。その最たる例が、写真のエノキであろう。樹高(目測にて)8m以上のボリュームで、根元が50%以上開口し、内部腐朽している。現状で自立しているのが不思議なくらいである。散策道の近隣であり早期の伐採が求められる。城跡全体として、大小の危険枝(枯枝)が付着しており、その把握と措置は急がれる。



(写真-4) 稲荷丸のエノキ(倒木の危険)



(写真-5) 石垣の草本・木本の繁茂

(5) 石垣の草本・木本

石垣の草本・木本の繁茂が見られる。出石城跡 全体を見ると、「管理されているところ・管理されていないところ」その箇所によってちががある。やはり、石垣を美しく見せるためにも、全体として管理の手を入れたい。環境汚染の少ない除草剤を使い、再発生の抑制を行う作業も検討を行うべきであろう。

(6) 石垣と樹木

「石垣と樹木」の関係について、これは石垣を有する城跡すべてに共通する問題・課題である。出石城跡だけではない。兵庫県の城跡であり、日本の城跡すべてに関わる問題・課題である。石垣保護の視点から、石垣に隣接する樹木は伐採することが望ましいという考えがあるように思われる。



(写真-6) 稲荷丸のシラカシ

(写真-6) は、石垣を傷める樹木の悪例である。石垣中から発生した実生木(シラカシ)が、石垣を持ち上げている。これは、伐採手法を検討し 伐らなければならない。ここで見ていただきたいのは、(写真-7) のモミジである。二の丸跡にある。このモミジは「冠・樹姿」共に良好で、景観を演出する樹木として、出石城跡では希少な存在といえる。しかし、石垣に隣接している。

石垣保護の視点から考えれば、このモミジは伐らなければならないのであろうか？

みどりのヘリテージマネージャーとして、惜しい……。実に、惜しい。そのモミジに隣接する石垣を見てみると、目視で見える限り、歪み・押し出しは見られない(写真-8)。このモミジは石垣を傷めることなく、ここまで生長したと仮定できないであろうか？



(写真-7) 二の丸跡のモミジ (石垣まで L=1.60m)



(写真-8) 二の丸跡のモミジと石垣の関わり

もちろん今後、石垣を傷める可能性はある。その可能性が生じた場合に、伐採等の検討を行えばよい。「石垣と樹木」その推移を観察し、見守ることも、みどりのヘリテージマネージャーが果たすべき役割である。このモミジと石垣が、今後どう推移するのか？ 長期的な観察がポイントである。

この他、城跡内には「石垣に隣接するものの、景観を演出するモミジ」は存する。その推移を観察し、見守る必要がある。

5 おわりに

出石城跡は文化財の域にとどまらず、出石の観光産業の柱であり、地域の宝である。地域住民の方々の思いとして、「このままの出石城跡で、観光客が来てくれるのだろうか？」という閉塞・危機感の声が多く聞かれた。「何とかしたい」との思いから、サクラを植える等の活動に繋がっていると感じた。

このように、出石城跡について地域参画の熱意・素地は十分にある。将来的に出石城跡を、どう導くのか、冒頭の地域の方々の思いとしての、「石垣とサクラの出石城跡」という価値観。これを大切にしたい。ここに、答えがあると感じる。将来の出石城跡の充実を考えるうえで、地域の理解は必要であり、地域不在の取り組みではカタチを成さないものである。

しかし、現状のサクラを見ると「石垣とサクラの出石城跡」を成すことは、なかなか容易なことではない。ここに、専門的・技術的な見識を加え、効果的な方向性を示すべきであると考えます。

短期間では結果は出ないので、観察しながら10年後、50年後に目標とする形に近づける。『文化財・観光資源として、魅力ある出石城跡』を後世に繋げていく。その取り組みの、きっかけとなれば幸いである。